

人はいつから人とともに何かをすることができるか

社会福祉学科 准教授 和田香誉

1. 3歳児の観察から

夏のある日、降りしきる雨に打たれて歓声を上げて遊んだあと、たっぷりお湯が入ったお風呂の中で、子どもたちはお互いの顔を見合せながら座り、また、楽しくお湯の中でゆったりと遊んでいた。そこに少し遅れて他の子がその仲間に加わろうとしていた時、保育士が、「みなさん、協力してください。　ちゃんがお風呂に入ります！」と子どもたちに言った。子どもたちはその声かけが終わるや否や、自分たちの体を少しずつ移動させ、それぞれがぴったりと体を寄せ合い、ちょうど、　ちゃんが入れるほどのスペースを空けた。　ちゃんはにこにこしてお風呂の中に入って行った。この場面での、3歳児に向けた保育士の「協力」という言葉が大変新鮮であった。わずか3歳の子どもでも、集団の間では互いに協力することを求められることがしばしば起こり、それが集団で保育されることの意義でもあり、人が社会生活をしていく時に必要な行動の形成の機会であると考えられる。

2. 共同行為 (Joint action)

人とともに何かを一緒にすることは、共同行為(Joint action)と言われる。　このような行動はいつからどのようにしてできるようになるのであろうか？

Tomaselloら(2005)によると、すでに、0か月からその発達が始まっている。通常0か月~9か月では、笑うと笑い返すなどのように、身体の動きと情動の共有をする。そして通常9か月~12か月になると、相手が何をしようとしているかがわかるというように、相手と目標と知覚の共有が可能となる。さらに、通常12歳になると、相手がどのようにしているかなど、相手の意図を理解して協調活動ができるようになる。それは、役割を理解して行動できるようになることでもある。つまり、意図(プラン)と注意の共有が可能となる。そのような行動は、初め、大人とのやりとりの中で形成されていくが、仲間同士でも共同活動ができるようになる。このようなことからいえば、3歳児が保育士の「協力」という言葉に対して難なく応ずることができるのは当然の発達段階にあると言える。

3. 調和的人間関係

Tomaselloらのように海外の研究からでさえ、子どもの共同行為 (Joint action)

の発達はかなり早い時期から開始されているが、近世日本の子育てでは、発達の具体的な目標の1つとして、調和的な人間関係の維持であったと小嶋（1989）は指摘する。それは近世日本での基本的な価値志向であった。人との対人的行動における社会性、社交性が重視されその学習が強調された。

このようなことを考えると、われわれ日本人は、人と連携し統合していくこと、言いかえると、人とともに何かをすることを、昔から強調されて、しつけられてきたと言える。

<参考文献>

- 小嶋秀夫 しつけの時代差 性格心理学新講座 第2巻 性格形成 金子書房 1989年
- Tomasello, M., Carpenter, M., Call, J., Behne, T., and Moll, 2005 Understanding and Sharing intentions: The origins of culture cognition. Behavioral and Brain Sciences, 28. 875-891